平成二十九年度冬季

全国大学国語国文学会 第一一六回大会案内・要旨集

期日　十二月二日（土）・三日（日）

会場　富山大学黒田講堂（五福キャンパス、富山市五福三一九〇）（一日目）
富山大学人文学部（五福キャンパス、同右）（二日目）
JR北陸新幹線「富山」駅〔南口〕から、市内電車で大学前行（大学前終点）で約15分
バス3番のりば（新高岡駅、小杉駅前、新港東口、新湊車庫前、富山短大、富大附属病院循環、北代循環の各行き（富山大学前下車）で約20分

後援　富山県

平成二十九年度冬季

全国大学国語国文学会

第一一六回大会ご案内

○同封の葉書に出欠をご記入の上、十一月二十四日（金）までに必ず到着するようにご返送下さい（**ご欠席の場合も必ずご返送をお願いいたします**）。

○十二月二日（土）の、昼食代（一、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・六、〇〇〇円、大学院生・五、〇〇〇円）、レジュメ資料代（一、〇〇〇円）、十二月三日（日）の昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座名称／全国大学国語国文学会第一一六回大会、口座番号／〇〇七二〇―五―四二二一九）にて十一月二十四日（金）までにお振り込み下さい。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願いいたします。

〒930-8555　富山市五福三一九〇
富山大学人文学部　呉羽　長　研究室
Eメール　kureha@hmt.u-toyama.ac.jp

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒102-8386　東京都千代田区三番町六番地一六
二松學舍大學　文学部国文学科　原研究室内
全国大学国語国文学会事務局
Eメール　zenkoku.nishogakusha.h28to30@gmail.com
FAX　〇三―三二六一―一三二四

○富山大学附属中央図書館では、同館内のヘルン文庫所蔵小泉八雲旧蔵書を公開します。ぜひ来場下さい。

場所　富山大学附属中央図書館五階ヘルン文庫
期間　12月2日10時～16時／12月3日10時～15時

第一日　十二月二日（土）　富山大学　黒田講堂

常任委員会（11時00分～11時30分）　人文学部一階大会議室
委　員　会（11時30分～12時00分）　人文学部一階大会議室

受付　12時30分～
開会　13時00分～
会場　黒田講堂ホール

開　会　の　辞　総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授　上野　誠
会　長　挨　拶　本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授　中西　進
県　知　事　挨　拶　富山県知事　石井　隆一
会　場　校　挨　拶　富山大学人文学部学部長　磯部　祐子

大会テーマ　「日本海を望む詩心」

基調講演（13時15分～15時20分）
家持と親鸞
音楽と文学の遭遇
―もし大伴家持の和歌にメロディーをつけたなら―
作家　五木　寛之

公開講演（15時40分～17時20分）
千石喜久という詩人―「日本海詩人」を視野に入れつつ―
作家・作詞作曲家　新井　満
室生犀星の〈抒情小曲〉―俳句と近代詩―
金沢大学名誉教授　上田　正行
東北大学教授　佐藤　伸宏

懇親会（17時50分～19時50分）
会場　富山大学生協レストラン
会費　一般・六、〇〇〇円　大学院生・五、〇〇〇円

第二日　十二月三日（土）　富山大学人文学部

A会場　第4講義室

（10時00分～11時20分）
家持と池主の交友 ―暮春の景をめぐって―
國學院大學教育開発推進機構助教　鈴木　道代
司会　群馬県立女子大学名誉教授　北川　和秀

大伴家持と「春日遅遅」の歌 ―鄭玄注『毛詩鄭箋』からの読み―
奈良県立万葉文化館研究委員　大谷　歩
司会　群馬県立女子大学名誉教授　北川　和秀

〈休憩〉

（11時35分～12時15分）
大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察 ―芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心―
東洋大学大学院文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程　清水麻利子
司会　都留文科大学名誉教授　関口　安義

〈休憩〉

（13時15分～14時35分）
「遣水のほとりなる岩」に座る薫 ―『源氏物語』「東屋」巻「絶えはてぬ」の独詠歌を視点として―
國學院大學大学院修士課程　高倉明樹子
司会　立教大学教授　井野　葉子

故前坊の遺言 ―秋好中宮の立后をめぐって―　湘南工科大学ライティングセンター特別講師　太田　敦子
司会　國學院大學教授　豊島　秀範

〈休憩〉
（14時50分～15時30分）
榊原本僚帖『源氏物語』「藤袴」巻（学習院大学日本語日本文学科所蔵）と中院通茂　学習院大学ＰＤ共同研究委員　武藤那賀子
司会　國學院大學教授　豊島　秀範

Ｂ会場　第６講義室
（９時20分～12時15分）
谷崎潤一郎「痴人の愛」論 ――着がえ続けるナオミ――　明治大学大学院博士後期課程　木村　愛美
司会　奈良教育大学教授　日高　佳紀

太宰治『お伽草紙』に見る〈言葉〉と〈嘘〉――「舌切雀」を中心に――　明治大学大学院博士後期課程　尾山　真麻
司会　奈良教育大学教授　日高　佳紀

（休憩）
（11時35分～12時15分）
中上健次『化粧』論 ――現代小説における仏教説話の受容――　神戸大学大学院人文学研究科・文化構造専攻博士後期課程　松田　樹
司会　大阪府立大学教授　山崎　正純

（休憩）

（13時55分～14時35分）
世阿弥の佐渡配流における「瀟湘八景」連想について

東京大学大学院博士後期課程　石井　悠加
司会　二松學舍大学教授　五月女肇志

（14時50分～15時30分）
吉井勇の富山時代

慶應義塾大学文学部教授　田坂　憲二
司会　和洋女子大学名誉教授　木谷喜美枝

（15時35分～15時45分）
研究発表奨励賞授賞式

閉会の辞

富山大学人文学部教授　呉羽　長

平成二十九年度冬季

全国大学国語国文学会 第一一六回大会

大会テーマ　「日本海を望む詩心」

北陸を含んで日本海沿岸の個々の地域では、紀記・万葉から現代に至るまで、その地域に根ざした歌謡・伝説などのほか、様々な知識人の文学創作の舞台となっています。今大会では、こうした日本海的風土体験の中で生み出された作品のうち、抒情的作品に注目し、その新たな意味を問おうと考えました。まず第一日目は、北陸における大伴家持に関しての、創作者（作家・作詞作曲家）の立場からの基調講演・歌曲披露、及び北陸にちなむ近現代の詩人をめぐっての文学研究者による講演をもって公開講演会を企画しました。また、本テーマを同日の公開講演会に限らず、大会全体のそれとして二日目の研究発表会にも及ぼすこととし、自由発表に加えて日本海的地域性も帯びた抒情的作品を多様な視点から深く追究する発表を募ることとしました。二日間を通し、会員の皆様が中央から見た日本海的周縁の文学の特質、地域の文学から及ぼされる中央への作用に思いを致すことにもなり、日本海が日本人の思惟と表現にとって何であるのかという問題に視野を広げる契機となればと考えます。

全国大学国語国文学会 第一一六回大会公開講演会

基調講演（13時15分～15時20分）

家持と親鸞　　作家　五木　寛之

音楽と文学の遭遇

―もし大伴家持の和歌にメロディーをつけたなら―

作家・作詞作曲家　新井　満

公開講演（15時40分～17時20分）

千石喜久という詩人―「日本海詩人」を視野に入れつつ―

金沢大学名誉教授　上田　正行

室生犀星の〈抒情小曲〉―俳句と近代詩―

東北大学教授　佐藤　伸宏

平成二十九年度冬季

全国大学国語国文学会　第一一六回大会
研究発表会

【公開講演】

千石喜久という詩人 ―「日本海詩人」を視野に入れつゝ

金沢大学名誉教授　上田　正行

千石喜久（明33・5～昭5・2）と言っても、地元でも殆ど知られていない詩人と言っていいだろう。簡単なプロフィルは以下の通り。

詩人、ジャーナリスト。富山県東水橋町生まれ。家業の売薬業を継ぎ、糸魚川隠棲間がない相馬御風を訪れ面識を得る。地元で出た「太刀魚」（大7・6創刊）「濤（のた）」（大9・7創刊）「東天紅」（大12・5創刊）「水郷」（大13・5創刊）等に拠りながら俳句（其水、几庫、木公の号）、詩、評論の分野で活躍し、「帆船」（大11・3創刊）にも多くの詩を発表。水郷詩社（千石方）では夏期文化大学講座（大13、14、15年）を開き地域の文化振興にも努めた。職場を富山薬専より金沢医科大に変え、大正15年には金沢新報の記者となり充実期を迎える。白鳥省吾主宰の「地上楽園」が創刊（大15・6）されると編集同人に加わり活発に活動。12月に「石川版　日本海詩人」を創刊（金沢新報社内）、次第に左傾して行く。昭和3年編集長になり、6月に起った四高のストライキに弟喜文が社研メンバーであることも手伝って、これを支援する論陣を張ったと言われる。4年11月、労農党に入党するも、5年2月、腸チフスで急逝、29歳。詩集に『文明の宣布』（大15・6大地舎）があり、知事のプロフィルを追った『石川県歴代長官物語』（昭4・1　金沢新報社）がある。

時代の転換点で北陸を舞台に活動を続けた一人のジャーナリストの軌跡を追い、その意味を考える。水橋には医師の石川玄知を中心とする文学サロンがあり、同期の金尾嘉一（梅の門）、尾島庄太郎ら多くの人が俳句を嗜み、志田義秀（素琴）の選で腕を研き、早逝した大須賀乙字に私淑した。水橋は小寺菊子の祖である尾島家の地であり、千石家とも血縁関係があり、後に角川源義が出てくることを考えると富山近代文学の重要な文化圏を形成していたことが分かる。

室生犀星の〈抒情小曲〉――俳句と近代詩――

東北大学教授　佐藤　伸宏

室生犀星の『抒情小曲集』（感情詩社、大正七・九）は、『愛の詩集』（大正七・一）に続く第二詩集であるが、そこに収載されている〈抒情小曲〉は、第一詩集に先行する犀星最初期の詩篇である。この詩集に寄せた序文の中で、北原白秋と萩原朔太郎は犀星の〈抒情小曲〉を眼にした際の驚きとその詩としての特異性について異口同音に語り出している。二人の詩人を驚嘆させたその詩の特異性とはいかなるものであるのか。従来の犀星研究においては、そうした独自の〈抒情小曲〉成立の背景として、犀星の俳句創作体験の重要性が指摘されてきている。明治三十七年から四十四年かけて犀星は郷里金沢で作句活動に専心していた。当時新

聞その他に発表された五百句を越える犀星の俳句が我々の手元に残されている。そして明治四十四年を境として犀星の創作活動は俳句から詩へと切り替わることになる。詩の創作に先行するそうした旺盛な作句体験が〈抒情小曲〉の特異性の形成の基底をなしたことは疑いを入れないが、そのように俳句を基盤とすることによって形成された詩の固有性の所在については、なお検討の余地が残されている。さらに犀星の〈抒情小曲〉と短歌から始発した詩――日本の近代詩人の殆どが短歌から詩へと移行している――との間に近代詩の様式としてのいかなる差異が存在するのかという問いもまた未だ残された課題としてある。

本発表では、そのような問題をめぐって、北原白秋、萩原朔太郎や斎藤茂吉等を視野に入れながら考えてみたい。併せてそうした犀星の〈抒情小曲〉が、文語定型詩から口語自由詩へと向かった近代詩の表現の歴史的展開において担う位置についても言及することにしたい。

【研究発表会／A会場】

家持と池主の交友

―暮春の景をめぐって―

國學院大學教育開発推進機構助授　**鈴木　道代**

天平十八（七四六）年六月、大伴家持は越中国の守に任ぜられた。その翌年の天平十九年二月二十一日から三月五日にかけて、家持は越中の掾である大伴池主と、家持の病を契機として書簡の贈答を行う。贈答の主旨は、家持が病気の為に池主と暮春の景を楽しむことができない悲しみを池主に訴え、それに対して池主は淡交の交わりが叶わないことを慰める内容となっている。二人の贈答は、琴詩酒を用いて楽しむこと、暮春という良い季節に春景を賞美することに主眼が置かれ、このことによって交友を深めることを述べてゆくのである。

家持が越中の暮春の景を、「方今、春朝春花、流馥於春苑、春暮春鶯、囀聲於春林。對此節候琴罇可翫矣」と春を重ねて述べるのに対し、池主は、「紅桃灼々、戯蝶廻花儛、翠柳依々、嬌鶯隠葉歌。可樂哉」と応答する。さらに「七言、晩春遊覧一首」「七言一首」という漢詩の贈答も行う。家持が一冬を越した越中の風土は、都とまったく異質の世界であったに違いない。しかし、二人が贈答において描いた暮春の景とは、そうした現実の鄙の景とは隔絶した中国詩学を基本とする漢詩的春景だったのである。

家持と池主とが贈答書簡においてこのような春景を述べたのは、漢詩的暮春の景に理想的なあるべき春景を見出したためだと思われる。池主はこのような春景を共に楽しむことができないことを「物色軽人乎」という。「物色」は詩学用語であり、劉勰の『文心雕龍』によると「物色相召、人誰獲安」という。美しい風物が人の心を揺り動かすことによって、人は心安らかではいられないのであり、それによって文辞が発るというのである。まさに漢詩的な暮春の景とは、詩作の心を触発する「物色」であったのである。本来ならば宴席において、あるべき暮春の景を楽しみ詩作することを理想とするが、それが叶わないことから、二人は中国詩を通した春景を媒介として交友の文学を作り交換したものと考える。

発表題目大伴家持と「春日遅遅」の歌
―鄭玄注『毛詩鄭箋』からの読み―

奈良県立万葉文化館研究員　**大谷　歩**

大伴家持の「うららうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば」（『万葉集』巻十九・四二九二）の歌は、近代的な孤独感を詠んだ秀歌として高く評価され、左注からは中国文学の受容の問題が認められて、その論議は深まりをみせている。左注冒頭の「春日遅遅鵠鶊正啼。悽惆之意非歌難撥耳。」は、契沖が『詩経』小雅「出車」の「春日遅遅。卉木萋萋。倉庚喈喈。采蘩祁祁。」を出典として指摘し、家持歌の春の情景はこの詩の翻訳として理解されている。同じ『詩経』豳風「七月」にも「春日遅遅。采蘩祁祁。女心傷悲。殆及公子同帰。」とあり、後漢の『毛詩鄭箋』は「春女感陽気而思男。秋士感陰気而思女。是其物化所以悲也。」と解き、唐代の『毛詩正義』も「春女悲。秋士悲。感其物化也。」と解く。春は女が悲しむ季節だというのが中国詩学の基本の理解である。これによれば家持の「春日遅遅」の語は、女が悲しむ季節である春に「悽惆之意」を覚える意であることになる。

家持の春の悲しみは、越中国守着任後に大病を患うことから出発するのだが、この時、家持は部下の大伴池主と漢文学による交流をとおして、池主と「友」という関係を結ぶ。この「友」とは琴詩酒をもって季節の風光を愛でる関係であり、それは家持が捉えた交友の理念である。この時に家持が池主に贈る歌は恋歌を基本としており、家持は女歌をもって池主との交友を展開するのである。しかし、後に池主は越中を去り、家持はそれを深く悲しむのである。この家持の春の悲しみは、中国詩学の理解による男を思う女の悲しみと、友の不在による悲しみとが不可分の関係にあるといえる。以上のことから、当該作品はそうした二つの悲しみの中に成立した歌であり、「悽惆之意非歌難撥耳。」とは、男を思う女の悲しみと、交友を実現できない男の悲しみとを止揚することで、男女の性差を超えた、人間存在の悲しみを描き出そうとしたのではないかと考えられる。

大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察
―芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心―

東洋大学大学院文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程　**清水麻利子**

片山廣子の短歌―佐佐木信綱・芥川龍之介・堀辰雄との交流を巡って―を、二年半前の夏季大会で発表した。芥川龍之介の最後の恋人「越びと」として語られることが多かった廣子は、アイルランド文学翻訳家の松村みね子の名で知られる。大会発表の際、アイルランド文学の翻訳が廣子の短歌にどう影響を与えているのかとの質問を受け、レディ・グレゴリー、イエイツ、シング等の翻訳作品や随筆、関係する資料を繙いた。一方で、佐佐木信綱から日本古典文学の薫陶を受けていた廣子の短歌の、万葉集からの受容を見逃してはならない

本大会のテーマ「日本海を望む詩心」に沿い、片山廣子の大伴家持を詠む短歌を考察する。

射水川あさ漕ぐふねの船うたを館にひとり守がききゐし
　み越路のましろの鷹をうたに詠みて鄙のむすめは見かへりもせず

これら「ひばりの歌」十二首を、「大伴家持の歌をよみかへす折ありて」の言葉を添えて、昭和二十二年六月の「心の花」（竹

柏会）に発表した。人間は素朴にそして匂やかに、自然は人間と一体化して詠まれ、家持からの接取と、近代女流歌人の万葉集受容が感じられる。

一方、共にアイルランド文学に造詣が深く交流があった芥川に、廣子が宛てた書簡は現在、富山の高志の国文学館（館長中西進）の所蔵である。平成二十九年一月、『高志の国文学館紀要』第一号に「芥川龍之介宛片山廣子書簡軸翻刻と注釈」（学芸員綿引香織）が掲載された。一部しか公開されてこなかった書簡十四通と歌稿「追分のみち」である。〈いやはてに浅間の山をかへりみてうつし身をたまははなれゆきけむ〉（大正十四年八月三十日書簡）の歌は、万葉世界に身を置いて文学的感興を湧き立たせ、家持を詠んだ歌にも繋がってゆく。

若い頃の象徴的な『翡翠』の歌は、素朴で人間味溢れるアイルランド文学の翻訳から身に付けた生活詠へと変化する。西洋的な視点に、万葉集の匂やかな抒情に包まれた写実的で平易な表現をもって、晩年の歌集『野に住みて』は新境地を見出したと言えるであろう。

「遣水のほとりなる岩」に座る薫
―『源氏物語』「東屋」巻「絶えはてぬ」の独詠歌を視点として―

國學院大學大学院生　**髙倉明樹子**

『源氏物語』「東屋」巻において、大君を追慕する薫が、故八の宮邸跡に新築された寝殿を訪れる場面がある。そこには、かつて足繁く通った邸の面影はなく、唯一遣水だけが昔と変わらずに流れ続けている。薫は、「遣水のほとりなる岩」の上で、「絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかげをだにとどめざりけん」という、亡き人の面影を水面に求める独詠歌を詠んだ。

ここで問題としたいのは、独詠歌を詠出する薫の居所が、「遣水のほとりなる岩」と描写されていることである。諸注釈書は、薫が岩に座ったまま、「とみにも立たれず」独詠していることについて、薫に懐旧の思いがあることを指摘している。「遣水」や「清水」といった水辺の空間が、故人を追想する場であることは、用例を見るに明らかであり、先行研究においてもこれまで論じられてきた。しかし当該場面において、薫が、遣水のそばの、とりたてて「岩」に座る意義については言及されてこなかった。「岩」は、古代より神が降り立つ場、神の依り代、また異界との境、神霊との交流の場とも捉えられてきた。したがって、そのような「遣水のほとりなる岩」の上で独詠するという行為には、薫の意思が内在していたと考えられる。

「東屋」巻に先行する「宿木」巻において、中の君から異母妹浮舟の存在を聞いた薫は、宇治の御堂の造営と、故八の宮邸の改築に着手する。この後、大君の「人形」である浮舟が住むこととなる新たな寝殿で、薫が「絶えはてぬ」の独詠歌を詠出したことは注目される。

本発表では、「遣水のほとりなる岩」という場に着目し、「岩」と「遣水」の象徴性の検討をとおして、薫の「絶えはてぬ」の独詠歌が、単なる故人を追想する歌ではなく、亡き大君の魂に呼びかけた招魂の歌であることを論じる。

故前坊の遺言
―秋好中宮の立后をめぐって―

湘南工科大学ライティングセンター特別講師　太田　敦子

『源氏物語』「葵」巻には、六条御息所が故前坊を回想する場面がある。故前坊が自身の死後、桐壺院に娘秋好中宮のことを「懇ろに聞こえつけさせたまひし」と遺言したというものである。故前坊は桐壺院の同腹の弟で、兄弟のなかでも特別親しい間柄であったことから、桐壺院は故前坊の代わりになってでも秋好中宮を世話するつもりであったこと、六条御息所には内裏住みを勧めていたことが語られる。秋好中宮への具体的な処遇は、自身の皇女たちと同列に見なすことであった。

しかしながら、そもそも故前坊が桐壺院に「懇ろに聞こえつけさせたまひし」意図とはどのようなものであったのか。桐壺院が秋好中宮を自身の皇女と同列に見なすことは光源氏、朱雀帝にも共有されており、光源氏は死を前にした六条御息所に対し、卑下の表現ではあるものの桐壺院の秋好中宮に対する処遇を引き合いに出しながら秋好中宮を妹と見なすことを述べ、朱雀帝もまた、六条御息所に秋好中宮を所望した際、桐壺院の娘と同様に過ごす形での入内を、と口にしている。つまり、故前坊の遺言は桐壺院を介しながら光源氏、朱雀帝へと受け継がれ、秋好中宮の身の処し方と関わっているということである。一方、六条御息所は秋好中宮が独身を貫くことを望んでいたと解釈できる言葉を遺していることから、入内ひいては立后を望んでいたとは考えられない。それにも関わらず、秋好中宮が冷泉帝後宮へと入内をし立后を果たしていく物語展開とは、六条御息所の意思とは異なる力が働いていることになろう。

秋好中宮の入内・立后とは光源氏の栄華の達成をかたどる出来事の一つであり、冷泉皇統を補完する意味を持ち、さらに母六条御息所とは異なる幸い人であったことを印象づける事柄であるが、本発表では、秋好中宮が立后に至るまでの軌跡に故前坊の遺言の影響を読み取り、光源氏の栄華には秋好中宮を紐帯とした故前坊の存在があることを明らかにする。

榊原本僚帖『源氏物語』「藤袴」巻
（学習院大学日本語日本文学科所蔵）と中院通茂

学習院大学・ＰＤ共同研究員　武藤那賀子

学習院大学日本語日本文学科は、伝二条為氏筆の『源氏物語』「藤袴」巻の写本を所蔵している。本帖は定家本系統に属するものである。特徴として、定家手沢本の本文を受け継ぐとされる「大島本」とはやや距離があり、肖柏本と三條西家本に近い本文を持つ古写本であることが注目できる。

本帖は、表紙と見返しが剥がれた中に、「十七のならひの八ふしはかま」と書かれた小紙片が挟み込まれている。これと、国文学研究資料館所蔵の榊原本『源氏物語』（以下榊原本）の「夕顔」巻・「蓬生」巻・「関屋」巻の題簽を比較すると、筆跡が一致していることが確認できる。また、本帖には正式な内題がなく、前遊紙表右上に後筆かと思われる小字で「ふちはかま」と書かれている。これを榊原本の内題と比較するとよく似ていることがわかる。これらのことから、学習院本「藤袴」巻は榊原本の僚帖であるといえる。榊原本は、『源氏物語大成』に採用されている本文である。『源氏物語大成』では十七帖が掲載されているが、その後

「若紫」巻のみ散佚してしまい、現在は全部で十六帖――「桐壺」「夕顔」「紅葉の賀」「葵」「賢木」「蓬生」「関屋」「絵合」「若菜下」「柏木」「横笛」「匂兵部卿宮」「東屋」「浮舟」「手習」「夢浮橋」巻――のみが残っている。つまり、本帖は、榊原本において玉鬘十帖が確認できる初めての例であるといえる。

「藤袴巻の本文は、もともと諸本に大きな異同が少なく、橋本本も諸本と大きな異同をもっていない。」（大内英範『源氏物語鎌倉期本文の研究』第一部第一章）と言われているが、本帖には、巻末に他本で確認出来ない一文を有しているおり、これが問題となる。また、本帖の題箋は、極札により、中院通茂の筆跡ということになっている。本発表では、本帖の巻末独自本文の読解を試みる。さらに、題箋の筆跡が中院通茂のものであるかを確認した上で、本帖が榊原本から外れた時期について考察する所存である。

【研究発表会／B会場】

谷崎潤一郎「痴人の愛」論
―着がえ続けるナオミ―

明治大学大学院生　**木村　愛美**

大正に入り、谷崎潤一郎は長いスランプに陥った。そこから脱する契機となったのが、「痴人の愛」である。発表当時、「痴人の愛」は巷の若い女性からの人気が高まり、その影響を受けて文壇での評価も上がっていった。当時「ナオミズム」という言葉の流行を生み、谷崎の自宅界隈では洋装が流行し、ナオミはモダン・ガールの先駆的存在となった。ここから、人気の一因が作中の装いに大きく依拠していると考えられる。これまでの研究で装いに注目して論じたものは非常に少なく、笠原伸夫「谷崎潤一郎論―ナオミ、あるいはモードの身体」や山田晃子「谷崎潤一郎の作品における服飾―装うということの魅力―」が挙げられる。両者は、ロラン・バルトや鷲田清一、山田登世子といったモード論に着目し、作品を分析した。しかし、「痴人の愛」の流行の火をつけたであろう同時代の装いについて詳細に研究した論はなかった。本発表では、ナオミの装いの変化に注目し、当時の新聞、雑誌記事を手掛かりにして社会情況を念頭に置きつつ、ナオミが装いを変えていくことがどのような意味を持っているか考察した。当時、百貨店や女性雑誌によって流行が生まれ、女性は装いによって身分から解放され、ファッションを楽しむことができるようになった。ナオミはそれを利用し、装いによって出自を隠し、最終的に洋服を着ることで、完全な美を手に入れることができた。当時、洋装は普及しておらず、西洋の活動写真の女優が着るような手の届かない装いであり、ナオミは洋装することでスクリーンの中の手の届かない存在となったのである。また、登場人物が洋装によって特別な存在になるというパターンは「少年」「嘆きの門」「青い花」で繰り返し見られる。谷崎は当時の装いの状況を上手に活かし、洋装による変身というテーマを「痴人の愛」で結実させ、スランプを脱することができたと結論付けた。

太宰治『お伽草紙』に見る〈言葉〉と〈嘘〉
―「舌切雀」を中心に―

明治大学大学院生　**尾山　真麻**

太宰治の『お伽草紙』について、「舌切雀」を中心に読み解い

た。

戦争末期に執筆された時代背景などから、先行研究では過酷な現実からの離脱願望として、作中に描かれた〈ユートピア〉が多く指摘されると共に、「カチカチ山」にのみ理想郷が登場しないと論じられてきた。しかし、狸は兎といる時に「まるで夢のやうだ」と感じており、兎との場所が狸にとっての〈ユートピア〉、つまり「カチカチ山」も他の三作と同じ構成（現実→ユートピア→現実）をとっている。そのため過酷な現実のみが描かれているという理由から「カチカチ山」を『お伽草紙』の要とする論に疑問を呈した。

本発表では、昔話との比較を行い、変更点の最も多い「舌切雀」に着目した。結びに置かれた「舌切雀」には、それまでの「前書き」「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」で描かれたキーワードが集約されていた。本作の中で、〈言葉〉は〈批評〉と〈嘘〉であると繰り返されている。昔話から結末が変更されているのは「舌切雀」のみであるが、この結末部でお爺さんが言った「いや、女房のおかげです。あれには苦労をかけました」は、そのまま感謝の言葉としてこれまで読まれてきた。しかし、〈言葉〉が一貫して〈嘘〉であると描かれている本作で、お爺さんの言葉だけが本当だと断言できるだろうか。生きていく以上、嘘は避けることができないというのが太宰の認識であり、「一国の宰相」にまで出世したお爺さんの暮らす世界が〈言葉〉と〈批評〉と〈嘘〉に溢れているだろうことは想像に容易い。以上のことから、お爺さんの最後の言葉もまた嘘であると結論づけた。

『お伽草紙』は、太宰が得意とした翻案小説の集大成であると共に、太宰が描き続けた〈言葉〉と〈嘘〉についての問題を見るうえでも非常に重要な作品であるといえる。

中上健次『化粧』論
―現代小説における仏教説話の受容―

神戸大学大学院人文学研究科・
文化構造専攻博士後期課程
松田　樹

中上健次の『化粧』（講談社、78・3）は、十二作の短編を収録した連作短編集である。単行本の巻頭を飾る「修験」において中上は、それまでの一人称から三人称へと話法を転換させ、都会の若者風俗を題材にした初期の作風から故郷の熊野を舞台として古典に範を取った中期の作風へと移行し始める。

柄谷行人の指摘以来、『化粧』は「私小説的」な短編と「物語的」な短編を併置した作品集全体の配列の問題が主に議論されてきた。だが、上記の区分を貫いて『化粧』に収められた短編では一様に「彼」という人称が用いられており、本作に初めて使用された三人称の話法の意義を看過することはできない。巻頭作「修験」を始めとして収録作の多くには冒頭に語り手が狂言回しのように登場し、典拠となる古典に批評や注釈を差し挟んでいる。柄谷に代表される如く文学史的な見取り図を前提とした先行論からは、こうした作品のナラティブにまつわる問題が見落とされている。

重要な点は、本作に参照されているのは『日本霊異記』や『今昔物語集』などの仏教説話が多く、作中にも仏教的なモチーフが散りばめられていることである。本作において中上は、仏教説話を典拠とすることで現代小説に生と死のドラマを回復している。ただし『化粧』の語り手は作品のプロットを仏教的な教義に回収することに違和を表明しており、仏教的なモチーフは同時に作品の舞台となる熊野地方に伝わる民間伝承や民俗学の知見へと接合されている。自らの故郷である熊野という土地と仏教説話を一体

のものとして捉えた所に古井由吉を始めとして同時期にやはり古典回帰の動向を示していた作家たちとは異なった中上の独自性があった。

本発表では、『化粧』における仏教説話の受容とそれにまつわる問題を各短編の語りに即して検討することで、本作以降古典や民間伝承を下敷きに「紀州サーガ」と呼ばれる小説世界を構築してゆく作家の問題意識とその方法論を摘出する。

世阿弥の佐渡配流における「瀟湘八景」連想について

東京大学大学院生　**石井　悠加**

永享六年五月、晩年の世阿弥は佐渡への配流の道中にあった。この経験をもとにした八つの小謡集『金島書』「若州」において、世阿弥は船路を漕ぎ出すこととなる小浜湾にて「伝へ聞く唐土の『遠浦の帰帆』とやらんも、かくこそと思ひ出でられて、（略）昔こそ身の若狭路と見えしものを、今は老の後背山。」と感慨をもらした。

「遠浦帰帆」とは諸注が示す通り、絵画・漢詩の題である瀟湘八景の景の一つで、日没時に帰路を急ぐ漁舟を配した水景を示す題である。玉澗・牧谿ら宋の文人の瀟湘八景画（一部現存）を、世阿弥の庇護者であった足利将軍家が愛蔵したことが、『御物御画目録』によって知られる。

世阿弥は同作品中で、「琵琶行」「配流の月」、順徳院詠、後鳥羽院詠などの様々な故事・和歌の引用によって配流の心情を表現している。出立に当たって八景の中からとりわけ「遠浦帰帆」を想起した理由とは何か。『金島書』内部検証に加えて手がかりとなるのが、同題で詠まれた和歌を、「水景」歌群と述懐歌群の間に配した同時代の『正徹千首』（一条兼良撰か）の配列意識である。「遠浦帰帆」の主体となるイメージとして両者に共通する人物像は、玉澗画賛詩の「老翁閑自説江南」の句に見られるような「老翁」であり、白居易や屈原などの人物に仮託されたものだろう。「遠浦帰帆」は自身に最も相応しい景であった。

そして佐渡配流を経験し、「瀟湘八景和歌」を残した京極為兼の存在が大きい。この歌群が室町後期の連歌集の遊紙に書き留められているのを見出した岩佐美代子氏は、詠風から詠作時期として佐渡配流時代を挙げられた。為兼にまつわる佐渡での歌徳的伝承は都に伝えられており、世阿弥も『金島書』で題材としている。中世以降、瀟湘八景は一般に風光明媚の地を賞賛する画題・詩題として享受された。しかし奇しくも佐渡では、流謫の身である自身を画中人物に擬した物語を生み出す源泉となっていた。世阿弥の瀟湘八景想起はその一端を窺わせてくれるのである。

吉井勇の富山時代

慶應義塾大学文学部教授　**田坂　憲二**

歌人吉井勇は、昭和二十年二月から十月まで、戦火を避けて富山県婦負郡八尾町（現在の富山市八尾町）に居住した。八尾移住直後に川田順は「家持の後と吾が思ふ歌人を越の国びとおろそかにすな」と詠み、吉井は新村出宛に「家持の歌の中なる婦負河の名をなつかしみ住むとおぼせや」と詠んでいる。吉井勇は、昭和十三年秋、京都に居を構えてから、昭和三十五年に長逝するまで晩年の二十余年を洛北・洛南・洛中で過ごし、川田順、新村出、

臼井喜之介らと交友を深めた。吉井の後半生において、京都を離れていたのは、八尾に居住した時期のみで、伝記的にも極めて重要な意味を持っていると考えられる。この八尾滞在期については、戦火も生活も極めて厳しい時期であったため、吉井自身も『私の履歴書』（日本経済新聞社）以外には多くを語らず、伝記研究もこの資料に拠っているのが実情で、その詳細については明らかになっていない。しかし、八尾での詠歌を中心とした歌集『流離抄』は、吉井自身によって「或る意味での記念すべき歌集であつて、自分の歌風にもひとつの転機を劃したものではないかと思ふ」と位置づけられ、また時代に翻弄される心情を歌い上げた優れた歌集であると認められる。したがって、この『流離抄』を生み出した富山時代について明らかにする必要があると考えるものである。

本発表では、以下の点を中心に考察してみたい。①吉井勇が疎開を決めた時期と理由。②疎開先として八尾が選ばれた理由。③八尾での吉井の住居の実態。④富山の人々との交友。⑤この時期の文学活動。⑥歌集『流離抄』とその周辺。考察に関しては、従来顧みられることの少なかった吉井勇の書簡、吉井勇宛の書簡などの生資料、当時の雑誌などに目配りをする。七十余年前吉井勇が滞在した富山県で本大会が開かれる縁もあり、地元の方々のご教示なども賜ることができれば幸甚である。

12月２日(土) 第１日

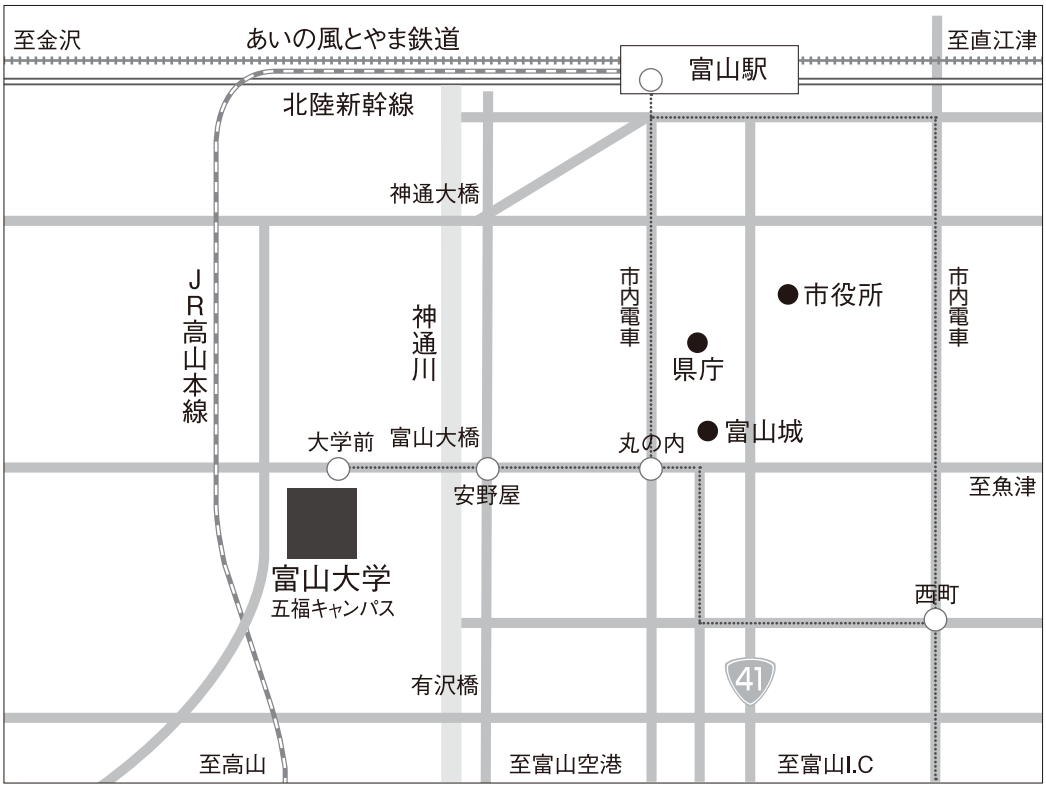
会　　場　　富山大学　黒田講堂

懇親会場　　富山大学　生協レストラン

12月３日(日) 第２日

会　　場　　富山大学　人文学部

A会場 第４講義室　B会場 第６講義室



■富山へのアクセス

●東京から　JR東京駅から北陸新幹線で約2時間8分　羽田空港から約1時間
●名古屋から JR名古屋駅から約3時間30分
●大阪から　JR大阪駅から約3時間20分
●札幌から　新千歳空港から約1時間30分

■交通案内

●富山駅（南口側）から富山大学五福キャンパスまで

・市内電車で大学前行（大学前終点）で約15分

・バスで３番のりば　高岡駅前、新高岡駅、小杉駅前、新港東口、新湊車庫前、富山短大※富山大学前経由、富大附属病院循環、北代循環の各行き（富山大学前下車）で約20分

・タクシーで約15分

●富山きときと空港から富山駅まで

・バスで約20分

・タクシーで約15分